

2020年受難節第五主日礼拝
「神は何を待っておられるのか」ルカ福音書 13:1～9

【聖書テキスト】

ルカによる福音書 13:1 ちょうどそのとき、何人かの人々が来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。² イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。³ 決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。⁴ また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。⁵ 決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」
⁶ そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。⁷ そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』⁸ 園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。⁹ そうすれば、来年は実になるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

1 いちじくの木 of 譬え

先週と同じ聖書テキストです。今週は後半です。イチジクの木 of 譬え、ぶどう園に植えたいちじくの木が三年経っても実を結ばないことに腹を立てた主人が、園丁に「切り倒せ」と命じる、しかし、園丁は答えます。「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥しをやってみます。そうすれば、来年は実になるかもしれません。もしそれでも駄目なら、切り倒してください。」この譬話において、いちじくの木は園丁の必死の執成しの故に、切り倒されるまでの猶予の期間を与えられています。

「ぶどう」や「いちじく」は、旧約聖書には度々登場し、イスラエルの民、神の民を示していると言われます。神から収穫を期待される者達です。しかし、その神の民について預言者ミカは、こう語っています。

「悲しいかな

わたしは夏の果物を集める者のように
ブドウの残りを摘む者のようになった。
もはや、食べられるぶどうの実はなく
わたしの好む初なりのいちじくもない。
主の慈しみに生きる者はこの国から滅び

人々の中に正しい者はいなくなった。

皆、ひそかに人の命をねらい

互いに網で捕えようとする。」(ミカ書 7:1～2)

神が期待する「主の慈しみに生きる者」たちは滅んでしまった…神は預言者ミカに厳しい言葉を預けます。神の慈しみに縋り、信じ、罪の赦しを乞い求めつつ、神の愛を証する者たちはもうどこにもいない。皆がみな、自分の利益のために人を罠をかけあいながら、殺し合いながら、自分は正しいことをしていると思い込んでいる。そして、利益を求めるための人殺しである戦争さえも「正しいこと」としてしまっている。ご自身が深く愛された神の民への深い悲しみ、痛恨の想いの溢れる告発の言葉です。

しかし、神がこのように嘆かれているのは、遠い旧約の時代の事なのでしょう。そうとは思えません。コロナ感染爆発、都市封鎖だと聞いて、不安に駆られ恐れに取りつかれ、他者を排斥し差別したくなる私達、「今だけ、金だけ、自分だけ」に生きる私達もまさに、神が悲しんでおられる一人一人なのではないかと思います。

2 今は何の時か

しかし、この譬話は旧約聖書とは異なります。旧約には登場しない「園丁」が登場しているからです。園丁は、「出来る限りのことをするから、切り倒すのを一年間待って欲しい」と主人に懇願します。実をつけないいちじくの木が切り倒されないで済んでいるのは、この園丁のお陰。しかし、そうは言っても、来年までに実を結ばなければ切り倒されることは確実です。直前の話で言えば、裁判官の前に立つまでに訴える人と仲直りしない限り、牢屋に叩きこまれて出て来られなくなる。今は、そういう時だと主イエスは仰います。

その時に、何をすることが正しいのか。私たちは、一人一人の判断です、選択です。私達は何をなすべきか、そして、神は何を待っておられるのか。今、危機にある私達一人一人に差し出されている課題の回答が、今日の聖書テキストにはあります。それをご一緒に聞いていきたいと思います。

3 罪深い者

ここで、前の段落、ピラトに虐殺されたガリラヤ人達とシロアムの塔が倒壊して死んだ十八人に戻ります。主イエスは、ピラトに虐殺されたガリラヤ人達に対してこう問いかけます。2節「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。」また、シロアムの塔倒壊事故で亡くなった十八人に対しても、人々に問いかけます。4節「また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んで

いたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。」新共同訳聖書では、両方とも「罪深い者」と訳されていますが、原文では異なる単語です。二節の方はいわゆる「罪深い」という意味の言葉ですが、四節の方は「負債」を意味する言葉が使われています。「罪」を神様に対する負債、返すべき借金を返していない状態と表現しているのです。イチジクの譬えで言えば、せっかく植えて貰ったのに、いつまでも主人に対して実を結ばない状態のことです。主イエスは、「残虐な支配者に殺されることも、突発的な事故によって命を落とすことも、罪に対する神の罰である、神の審きである」とは仰らない、そうではなくて主イエスは問いかけておられるのです。「あなたがた一人一人はみな、みな等しく自己中心的な思いに生きる罪ある者ではないのか。万物の造り主である神様に対して何の負債も、何の負い目もないと思っているのか」と。

4 滅びる

この問いかけを前に考えられること、残虐な支配者により迫害されたり、事故や災難にあたりして死ぬことと、「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と主が言われる「滅びる」は、同じことなのかという事です。「死ぬ」事と「滅びる」ことは同じなのか？いえ、そうではありません。主は「決してそうではない」と言っておられます。主イエスは、はっきりと仰る。「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と。イエス様にとっては、悔い改めていない人間は既に滅びの中に生きている、滅びるべく生きている一人一人です。「滅び」とは、肉体の死のことではないのです。

5 死んでいた いなくなっていた

先程の「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」の「滅びる」という単語が、もっとも沢山出て来るのは、ルカ福音書15章です。ルカによる福音書の15章は、ルカ福音書の中心的なメッセージが込められている箇所ともいわれていますが、三つの譬え話からなります。最初は群れから離れて迷子になってしまった一匹の羊の話、次は、失われた一枚の銀貨を必死で探す女の話、そして、三番目は父親の遺産を生前に受け取り家出してしまった放蕩息子の譬え話が出てきます。

迷子になった一匹の羊のその中に出てくる「見失った」という単語、また、失われた一枚の銀貨を必死で探す譬えの中に出て来る「無くした」と訳されているギリシャ語が、今日の箇所の「滅びる」と同じ単語です。そして、豚の餌を食べたいと思うほどに落ちぶれた弟息子が、雇い人の一人にしてもらいたいと家に帰ってきた時、父親は駆け寄って息子を抱きしめて語った言葉、

「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ」、この「いなくなっていた」が「滅びる」と同じ単語です。つまり、父親にしてみれば、「いなくなっていた」は「死んでいた」と同じなのです。この場合の「死んでいた」は、父親との関係性において死んでいたということです。神との関係を絶つ、神とは関係なく生きようとする、そのこと自体が、神様から見れば「滅び」であると、15章の三つの譬え話から分かります。

6 悔い改め

そう、ルカ福音書15章、ルカ福音書全体を貫く主題は「悔い改め」です。「悔い改めって、うじうじと後悔しながら生きることじゃないか？」と私達は考えがち、後悔や反省と同じニュアンスでとらえがちですが、決してそうではありません。いえ、後悔や反省と悔い改めはまったく異なるものだと言えます。

主イエスは、悔い改めについてどう仰っているか？を見れば分かります。一匹の迷子の羊の譬え話では、「**悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある**」(15:7)と言い、無くした銀貨の譬え話では、「**一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある**」とおっしゃっています。つまり、主イエスが仰りたいのは、「悔い改めとは、死んでいた者が生き返った喜びがあるものだ」ということ。愛しく大切に思っているのに滅んでいた者が生き返る喜び、大きな喜びが神にある、天にある、罪によって死んでいた者、滅んでいた者が、生き返ること、それが悔い改め。そして、神が今、待っておられるのは、私達一人一人の悔い改めです。被造物である私たちにとっての最大の喜びは、造り主であり愛である神の喜びである事も確実です。

「悔い改める」とは、本来生きるべき場に帰ることです。神様との愛の交わりの中に帰ること。本来生きるべき場に帰ることです。父なる神の家に帰る、私達の真実の実家に帰ることだと言ってよいのです。その為の期間を神からいただく為に、園丁であるイエス様は、神さまに執成してくださり、私達の為に命がけで働かれます。

7 このままにしておいてください

「園丁」のお陰で、私たちはまだ猶予を与えられています。つまり、その間、神は待っていてくださるのです。私達が神の御許に帰って来ることを。しかし、猶予の時は無限に続くわけではない。だから、今という時を無駄にしてはなりません。洗礼者ヨハネは、神に立ち帰ることなく、見せかけの洗礼を受けようとする人々に向かってこう言っていました。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めに相応しい実を結べ。……斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」洗礼者ヨハネは、審きの斧を木の根元に置きました。

しかし、その後に宣教を開始した主イエスは、木の根元に置いた斧を振るわれません。いちじくの木を愛する「園丁」として、「私が精いっぱいのことをやりますから、今年もこのままにしておいてください」と、ぶどう園の主人である神に執成してくださるのです。

「このままにしておいてください」の「このままにする」という言葉には、「赦す」という意味があります。主の祈りの「わたしたちの罪を赦してください」がそうだし、「もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい」という主イエスの言葉の中にも出てきます。そして、この「赦す」という意味も「このままにしておく」という意味も持つ単語が、ルカ福音書で最後に出てくるのは、あの十字架の祈りです。主イエスは、ついに悔い改めることなく、ご自身を十字架に磔にして正しいことをしたと確信している者たちのために、祈ってくださいました。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」この祈りは、「父よ、彼らをそのままにしておいてください。私が彼らのために死に、復活し、そしてこれからも語りかけますから」という意味だと分かります。

この言葉を聞いて、イエス様の隣の十字架に磔にされていた犯罪者は衝撃を受けました。そして、悔い改め、罪の赦しを乞い求めました。イエス様は、その彼に対して、こうおっしゃいました。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」この主イエスの言葉を聞いた時、犯罪人は「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」のです。まさに「神の天使たちの間に喜びがある」時、神が待ち望んでおられる「時」でした。そして悔い改めた罪人にも、滅びから救い出された大きな喜びと平安が与えられました。その喜びは、肉体の死を凌駕する喜びです。私たちキリスト者は、主イエスによって与えられた悔い改めと信仰によって神の前に死んでいた者ですが、主の十字架と復活によって今生きる者達です。

だから、悔い改めとは、「あなたは今日、わたしと一緒に楽園にいる」という主イエスの宣言をこの身に受けつつ生きる事とも言えます。この宣言を聞きつつ、犯罪者は十字架の上で死にました。犯してきた罪に対する人間の

裁きを受けて死にました。でも、滅びたわけではありません。彼は真の裁判官の御前に立つまでに訴える者と仲直りし、切り倒される前に悔い改めに相応しい実を結びました。待っている父なる神の御許へと帰っていくことができました。

8 イタリアの医師の話

COVID-19感染拡大はやみません。中でもイタリアは大変な状況のようです。COVID-19での死者数は中国本土を抜いて世界一位。ベットも人工呼吸器も防護服も、治療に必要なものが圧倒的に足りない医療崩壊が起こっていると言われています。そんな渦中にあるイタリアのロンバルディアの病院で勤務している38歳のジュリアン・アーバン医師によって書かれた手紙をインターネットで見つけました。その手紙には“医師たちの最も暗い夜に輝く光”というタイトルがつけられていました。全文をお読みします。

「私達は最も暗い悪夢の中にいました。過去3週間にイタリアの私たちの病院で起こっていることを見たり経験していることを、ことが起こる直前まで想像だにしていませんでした。悪夢は流れだし、川はどんどん大きくなっています。最初は数人の患者が来て、そして、数十人、やがて数百人が来ました。今では、私たちはもはや医師として人を治すのではなく、誰が生きるべきか、誰が死ぬために家に送られるべきかを決める仕分け人となっています。

2週間前まで、同僚と私は無神論者でした。それは医者として普通のこと。科学を通して神の存在を排除することを私達は学びましたし、私は両親が教会に行くのを笑っていました。

9日前、75歳の牧師が病院に入院しました。彼は親切な人でした。彼には深刻な呼吸障害がありました。しかし、彼はいつも聖書を持っており、亡くなりつつある人の手を握って聖書を読み、私たちに感銘を与えました。私たち医師は皆、疲れ、落胆し、心も体も極限に達していましたが、時間があるときには、彼の話を聞きました。

でも、もう限界に達した。これ以上は何もできないというところにいます。人々は毎日死にかけて、私達は疲れきっており、同僚の2人が亡くなり、他にも感染した同僚がいます。その時、初めて私たちは神に助けを求め始める必要があることに気づきました。僅かな空き時間があるとき、今は私たちは神の助けを求めています。私たちはかつて激しい無神論者でしたが、互いに話すとき、今では毎日、平安を求めて、病人の方々の治療を続けられるよう神に求めています。このことは信じられないほどの変化です。

昨日、その75歳の牧師は亡くなりました。ここでは3週間で120人以上の死者が出ましたが、私たちは特に彼の死によって心が砕かれました。彼は、ひどい病状でしたが、私たちの困難な状況の中で、私たちがもはや見出すことを望んでもいなかった平安を私たちにもたらすことができるようにと努力してくれていました。この牧師は主のもとに行かれました。

このように状況が続くなら、すぐに私たちも神のもとに召されるでしょう。私は 6 日 家に帰っていません。いつ最後に食べたのかさえわかりません。私はこの地球上での自分の小ささを実感しています。

でも、私は最後の息があるときまで人々を助けたいと思います。私は苦しみと死に囲まれている中であっても、神に戻ることができたことを嬉しく思っています。」

ジュリアン・アーバン医師は、ほんの3週間前は神など必要ない…と神なしで生きて来たのでしょうか。まさに滅ぶべき命を生きていた、滅びを生きていました。しかし、この大きな混乱状態に叩き込まれて、日々消耗する中で一人の牧師の命に触れた、滅びを生きるのではなくキリストに生かされる人の命に触れ、キリストと出会い、そして神の御許に戻ってきました。混乱を極める中であって、喜びと平安の内になすべき事を示されています。待って下さった神を賛美せずにはおられません。

9 神の喜びに生きる

オリンピック延期が決まったとたんに始まったように見えるコロナウィルス感染爆発による混乱は、私達の世界を危機に陥れています。東京都はじめ神奈川、千葉、埼玉など首都圏ではいつ都市封鎖が始まり、外出禁止令が出させることになるやもしれません。私達が大切にしてきた礼拝もいつできなくなるかも分からない状況であり、今まで経験した事のない事態に直面しています。そんな中、教会は何の力も持たないのか？教会が取り次いできたキリストの命の言葉はウィルスに負けてしまうようなものだったのか？多くの牧師や信徒は不安を抱いたのではないのでしょうか。

しかし、そうではない、キリストの命の言葉は死に打ち勝ち、滅びを生きていた人たちを、輝ける命を生きる者達へと変える力がある！このイタリアの医師の手紙は私達を、いえ、ウィルスの死の陰に呑み込まれているこの世の人々を再び神の御許に引き戻す喜びと平安を示してくれていると思います。

私達は死ぬでしょう。しかし、神の御許に立ち帰る時、嵐の中にも揺るがない喜びと平安が与えられます。何者にも覆す事のない喜びと平安、悲しみの中にあってもさえ与えられる平安です。何故でしょうか。それは父なる神の喜びであり、平安だからです。父なる神は私達が御許に立ち帰り、ご自身の喜びと平安に生きる事を何よりも待っておられます。罪にまみれたこの世界なのに。なんという事かと思い、感謝し賛美せずにはおられません。

注記)

説教の中で紹介したジュリアン・アーバン医師の証ですが、フェイクニュースの疑いがあるようです。以下が検証ページです。

http://evangelicalfocus.com/blogs/5206/Christian_fake_news_The_story_of_the_ath_eist_doctor_in_Lombardia?fbclid=IwAR2GoBUnGxsb4oYHl2C1uXZzcYcNjLeTmPWGPzXDNlaKyL5zBBqLXqTg0dQ

上記の検証サイトでも触れられていますが、医師の名前や写真などいくつかの点で事実と異なる点は認められるものの、「核となった出来事」は実際にあったのではないかと考えられています。

私もこの医師の手紙の中には、悲惨で混乱したイタリアの医療現場に、人々を助ける為に自ら歩み出るキリストの姿が描かれていると考えました。それはキリストの奇跡の力でCOVID-19感染を止めるとか癒す、人間には都合のよい似非救い主の姿ではない、神の方に立ち帰らせる真の救い主の姿です。キリストがそのように働かれてきたことは、人間の歴史の中でも多くの人々が証言しています。

従って、医師の名前など細かい点では不正確である事を留意しつつ、この医師の手紙を説教から削除することは致しません。これからも、イタリアはじめ世界中の医療現場でコロナウィルスと戦う医療従事者達がイエス・キリストの命に触れて力が与えられますように、助けられますように、祈っていきたいと思います。